

## V. 研修・出張報告

### 1. 第50回東海・近畿地域附属農場協議会

志水恒介

開催期日：平成21年7月30日～7月31日

開催場所：三重大学

#### 1) 会議内容

##### (1) 協議事項

###### (1) 第Ⅱ期中期計画策定に伴う付帯施設農場の取り組みについて

文科省では第Ⅱ期中期計画に伴う付帯施設の運用について、大学間の連携、国公立大学を通じた共同利用・共同研究の推進という方向性が示されていることから、各大学でも取り組みや方向について協議がもたれた。

(2) 平成22年度地域幹事の選出について、平成22年度は岐阜大学が全国農場協議会の幹事のため名城大学に決定した。近畿大学は平成24年度の幹事予定となった。

(3) 技術等発表会(技術集録)は地域幹事が請け負い、取りまとめることになった。

###### (4) 附属農場の地域社会との連携実態について

各大学においてどのような活動を行っているかについてのアンケート結果が発表された。

#### 2) 技術等発表講演会

「有色米の品種保存と利用に関する教育研究および地域への貢献」(大阪府立大学)、「ニホンナシにおける溶液受粉法の検討」(京都府立大学)、「礫耕栽培における製鋼スラグの礫代替物としての利用可能性」(三重大学)が各担当者から発表された。

#### 3) 現地見学

##### (1) 紀伊・黒潮生命地域フィールドサイエンスセンター見学

三重大学上浜キャンパスより約9.5km離れた津市高野尾町に位置し、水田、畑、果樹園、ガラス室、茶園、畜舎、農産加工室などからなる総合農場で、35haの面積を占めている。大学からも比較的近く、農業生産に関する多様な実習研究を行うとともに、教員および学生の研究の場として活用されている。場内には間伐材を利用した施設もいくつか見受けられた。



写真 伊勢イモの栽培ほ場

##### (2) 伊勢いも農家見学

多気町の伊勢いも栽培ほ場を見学した。

##### (3) 酒蔵 河武醸造(株)見学

三重大学で収穫した有色米を用いたオリジナル日本酒作りについて説明を受けた。



写真 まごのみせ

##### (4) 昼食「まごのみせ」

相可高校食物調理科の生徒が運営している「まごのみせ」で昼食兼視察となった。この施設は仕入れ、調理、サービスなどを全て生徒自身で行い、TVなどでも取り上げられ、全国から見学者が絶えず、地元でも大人気のお店となっている。今回は先に見学した伊勢いものどろろも食べる事ができた。とても粘りが強く、いもの味が濃いどろろだった。生産だけでなく、加工や販売について地元や地域の特色を取り入れ、工夫することの重要性を改めて実感した視察となった。

## 2. 平成21年度全国大学附属農場協議会秋季全国協議会

文室政彦

開催期日：平成21年9月10日～11日

開催場所：ホテルメトロポリタン盛岡（担当：岩手大学）

### 1) 会議内容

#### (1) 協議・報告事項

協議事項の「実習教育の質保証と農場の管理・運営に関わる経費、人員について」では、国立大学の予算等について協議された。

承合事項として、九州大学がとりまとめた大学関連の景気浮揚政策による施設整備等について説明された。

#### (2) 平成21年度全国大学農場技術賞・教育賞表彰式および発表会

「大学農場技術賞」は茨城大学高田圭太氏ほか4名の農場技術職員に贈呈され、各受賞者から受賞講演が行われた。「大学農場教育賞」は千葉大学北条雅章氏が受賞された。

#### 2) 特別講演

「盛岡高等農林学校創立から受け継がれてきた知的財産」で岩手大学名誉教授若尾紀夫氏が講演されたが、興味深い内容であった。

#### 3) 教育研究集会シンポジウム

「岩手大学農学部における食農教育の実践」の演題で農学部准教授佐川亨氏、「農場実習から学んだもの」の演題で、農学部3年生の学生2名が農場実習の内容と感想を発表した。各自、思い思いの課題を持ち、意欲的に取り組んだ様子がわかり、今後の農場実習の進め方に参考になった。

#### 4) 現地視察

岩手大学農学部附属滝沢農場、花巻農産施設「だあすこ」、花巻市の雑穀畑を視察した。附属農場では、ほ場が火山灰土のために、燐酸施用量が通常の2～3倍高い。品種は「ひとめぼれ」が中心であり、「コシヒカリ」や「ササニシキ」などは気候的に適さないということであった。収量は通常の移植栽培で10a当たり590kgと多く、技術力が高いと感じられた。岩手県は雑穀の生産量が全国の8割を占め、県をあげて取り組んでいる。花巻市の現地では農業改良普及センター普及指導員の案内でヒエの集団栽培ほ場を見学したが、収量は10a当たり200kg程度、農家の収入はkg当たり300円程度で、国からの産地作り交付金などもの支援もあり、水稲作に見合う収益が得られるとのことであった。ヒエは登録農薬がなく、病害虫が発生しても対処できない。また、除草は機械除草を行っているが、株間の草はとれないので雑草被害が多い。基本的に連作はせずに、ヒエの後は水稲に戻される。雑穀の栽培は集落営農による取り組みが中心とのことであり、機械化栽培体系が確率されている。



写真 ヒエの栽培ほ場

## 3. 外食・中食 設備機器フェア2009

友廣教道

開催期日：平成21年9月9日～11日

開催場所：インテックス大阪

出展内容：『外食・中食 設備機器フェア2009』が2009年9月9日～11日の3日間、インテックス大阪において開催された。湯浅農場で生産しているマンゴー（‘アーウィン’、‘愛紅’）、ドラゴンフル